

優秀賞

『愛なき世界』

三浦しをん著、中央公論新社、2018.

梶 美瑞希（農学部 植物生命科学科 3年）

知らないことを知ることは楽しいことである。たとえ、その知識が日常生活でなんの役にも立たなくても、知った瞬間の「へえー」に全てのワクワクが詰まっている。最近、タイパ（＝タイムパフォーマンス）が重視され、最小限の時間で高い満足度を得ることを求める人が多いようだ。しかし、私は、そんな風に効率だけを考えたやり方が好きではない。余白の時間にこそ新たな発見がたくさんあるのに。余白の時間の方が良いアイデアが浮かぶときだってあるのに。音楽ならイントロや間奏にその曲の良さが詰まっているのに。

本作品には、そんな「知りたい」という気持ちに情熱を注ぐ人々が登場する。洋食屋の見習いの藤丸陽太は、個性豊かな植物好きが集まる植物学の研究室へ出前を届ける中で、恋愛に興味ゼロで葉っぱの研究に夢中な大学院生・本村紗英のことが気になり始める。藤丸のライバルは植物なのか、藤丸は本村に自分の想いを伝えることができるのか。植物学とはどんな世界か、研究室ではどんな実験をしているのか、植物の魅力が多く描かれている。理系ではない人にも研究の雰囲気伝わって一冊である。

私はこの本を読む中で気づいたことがある。本村の植物に対する「知りたい」と、藤丸が持つ本村のことを「知りたい」と思う気持ちは同じものなのではないか。もっと知りたいと願う対象が植物であっても人間であっても良いじゃないか。実は、この気づきに対して作中にこんなヒントが出てくる。「その情熱を、知りたい気持ちを、『愛』っていうんじゃないすか？」と。その気持ちの正体は愛だとすれば、納得だろう。

ならば、植物はどうだろうか。植物だって人間と同じ生物で、地面で必死に生きているのに。人間のように言葉を使わない、自力で動けない植物に愛はないのか。植物が生きている世界は愛のない世界なのか。「知りたい」と願われている植物は愛を受け取っていないのか。もし、植物が愛のない世界に生きているとすれば、植物の研究にすべてを捧げる研究者も同じように愛のない世界で孤独に生きていかなければならないのか。そんな寂しいことないんじゃないか――

植物のことをもっと知りたくなってきたところでそろそろ終わりにするが、研究というものには少しの時間で終わるものではない。むしろ終わりが無いものだ。私は研究者の端くれだが、終わりのない道りを行く途中、たとえそれが遠回りであっても「知りたい」と思う気持ちを大事にしたい。読書も少し離れた道にあるけれど、自分にはなかったものが得られる存在だと思う。あなたも少し遠回りをして、この本を読んでみてはどうだろうか。